

## 第50回世界連邦推進全国小・中学生ポスター・作文コンクール

ポスターの部

もくじ



文部科学大臣賞

「海の叫び 届いていますか」

綾部市立八田中学校 二年 <sup>あらい</sup>荒井 <sup>えりか</sup>梨利花



特賞

「海はゴミばこじゃないよ！みんな ないてる」(はり絵作品)

海津市立城山小学校 二年 <sup>かとう</sup>加藤 <sup>まなみ</sup>愛望



特賞

「未来を創ろう」

富士宮市立大宮小学校 六年 <sup>ひがし</sup>東 <sup>ぜんせい</sup>善惺



特賞

「世界をひとつに」

倉敷市立味野中学校 三年 <sup>ささき</sup>佐々木 <sup>みな</sup>光菜



湯川スミ賞

「せかいは1つのチームです」

朝日塾小学校 二年 <sup>たかしま</sup>高島 <sup>りつ</sup>理嗣



第50回記念特別賞

「世界は1つ」

海津市立平田中学校 二年 <sup>もりかわ</sup>森川 <sup>まいか</sup>莓花

👑 文部科学大臣賞  
「海の叫び 届いていますか」

綾部市立八田中学校 二年 <sup>あらい</sup> 荒井 <sup>えりか</sup> 梨利花



👑 特賞

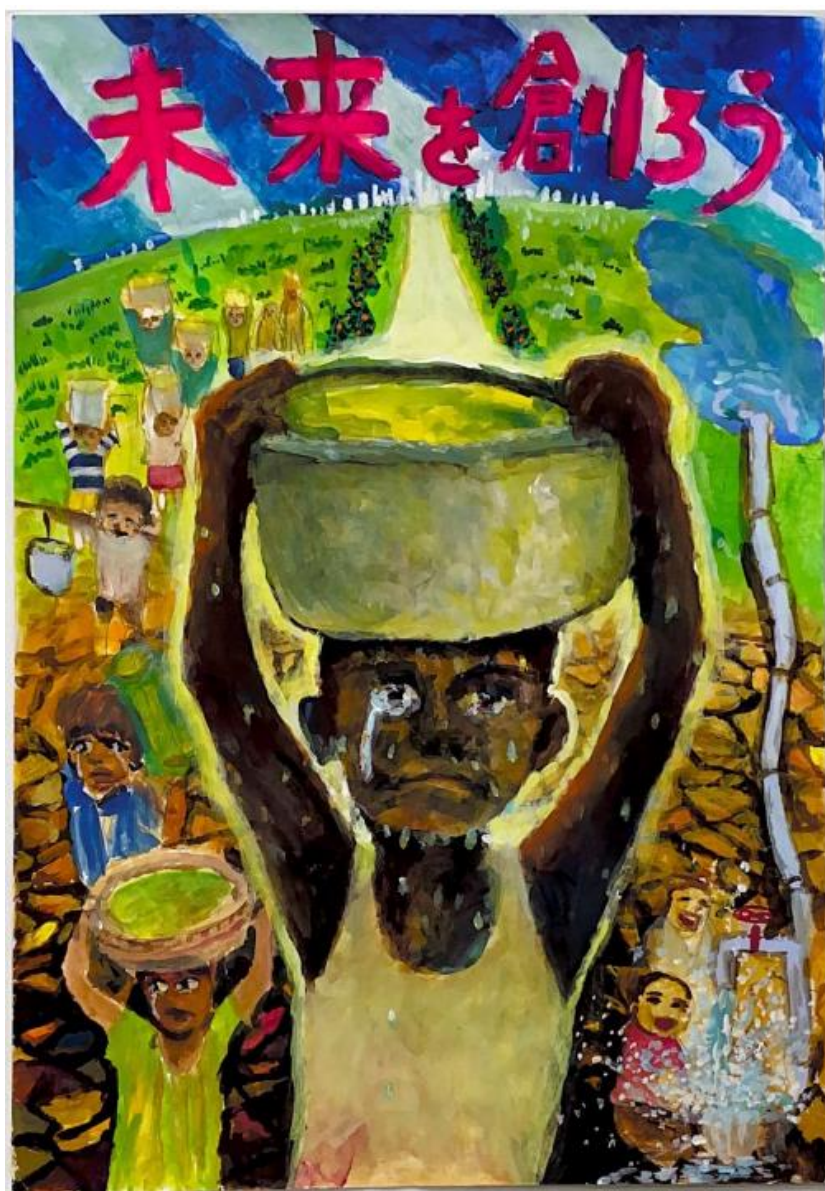
「海はゴミばこじゃないよ！みんな ないてる」  
(はり絵作品)

海津市立城山小学校 二年 <sup>かとう</sup> <sup>まなみ</sup> 加藤 愛望



👑 特賞  
「未来を創ろう」

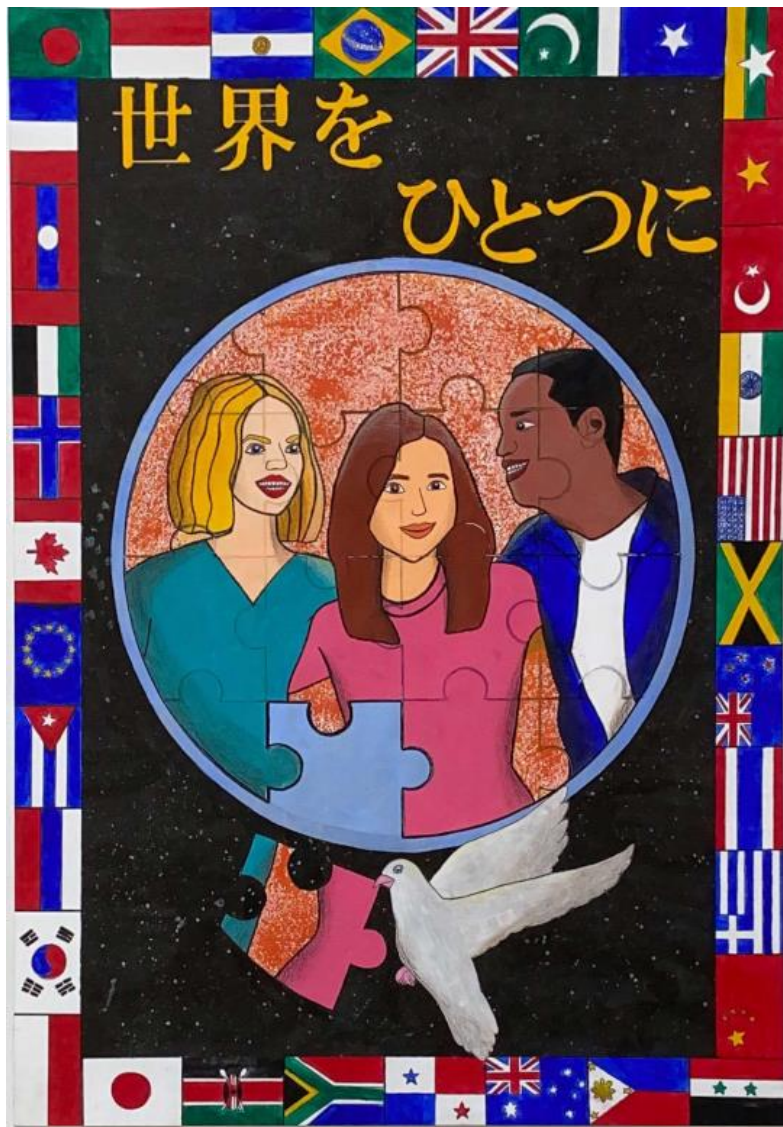
富士宮市立大宮小学校 六年 <sup>ひがし</sup>東 <sup>ぜんせい</sup>善惺



👑 特賞

「世界をひとつに」

倉敷市立味野中学校 三年 佐々木 光菜



👑 湯川スミ賞

「せかいは1つのチームです」

朝日塾小学校 二年 <sup>たかしま</sup> <sup>りつ</sup> 高島 理嗣



👑 第50回記念特別賞  
「世界は1つ」

海津市立平田中学校 二年 <sup>もりかわ</sup> 森川 <sup>まいか</sup> 莓花



## 作文の部

### もくじ



文部科学大臣賞

「未来のために」

武蔵野市立境南小学校 五年 おおきた しゅんや 大北 隼矢



特賞

「海とプラスチックごみ」

綾部市立西八田小学校 六年 やまうち じげん 山内 慈元



特賞

「新しい社会を生きる」

富士宮市立柚野中学校 二年 つだ かづき 津田 佳月



特賞

「星と仲良く暮らせる社会へ」

武蔵野市立第五小学校 六年 かねこ 金子 ひなか



湯川スミ賞

「プラスチックごみと動物たちの被害」

綾部市立西八田小学校 六年 あわの みさき 栗野 実咲



第50回記念特別賞

「「知る」ことが未来をつくる」

大館市立有浦小学校 六年 ほんだ ひさき 半田 悠貴



👑 文部科学大臣賞  
「未来のために」

武蔵野市立境南小学校 五年 <sup>おおきた</sup> <sup>しゅん</sup> <sup>や</sup> 大北 隼矢

「一九〇〇年に十三、六度だった東京の平均気温は、二〇〇四年には十七、三度になった」という資料を見て、ぼくは驚いた。

「三、七度なんて、たいしたことない」と思うかもしれない。

けれど、冷蔵庫と冷凍庫の温度を、三、七度上げたらどうなるだろう。きっと、ぼくのアイスは溶け出して、お父さんのビールはぬるくなる。食材の足が早くなって、お母さんは困ってしまうにちがいない。

こうした小さな気温変化の積み重ねが、異常気象を生み出し、生態系を壊している。このままだと日本は、夏がさらに暑くなり、四季を感じられない国になってしまう。ぼくは、暑いのは苦手だ。汗をかくのもいやだ。エアコン代がもったいない。だから、地球温暖化について真剣に考えようと思った。

地球温暖化の主な原因は、温室効果ガスだ。そのガスの七十六%は、二酸化炭素だ。

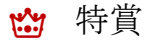
日本は、二酸化炭素を一年に十二億トン以上出している。その六十五%は、石油などのエネルギー使用時に出るといふ。さらに、日本人が使う製品は、生産から破きするまでの間に、大量の二酸化炭素を出すそうだ。

日本の社会は、エネルギー転換を図るべきだと、ぼくは考える。主要エネルギーは、太陽光や水力、地熱や風力、バイオマスにする。

家庭では、プラスチック製品の使用を減らす。まずは、一年に約三〇五億枚、一人約三〇〇枚使うというレジ袋を、エコバッグに変える。マイボトルや紙ストローを選ぶ。テレビや電気のつけっぱなしに注意する。二酸化炭素が出ない乗り物、自転車で移動する。

こういった、一人ひとりの小さな努力の積み重ねが、美しい未来を作っていく。

ぼくたちがおじいちゃんになっても、四季を感じられる平和な日本であり続けるように、自分が今できることから始めていきたい。



特賞

## 「海とプラスチックごみ」

綾部市立西八田小学校 六年 <sup>やまうち</sup> 山内 <sup>じげん</sup> 慈元

今、地球上にあるプラスチックの量は、約八十億トンです。その内、海にあるプラスチックごみは、約一億五千万トンあるといわれています。という記事を見た。

ストローや下敷き等、僕はプラスチック製品を毎日の生活の中で当たり前のように使い、不要になったら捨てている。けれど、海にあるプラごみの約八割が町から来た物だという事を知らなかった。町にポイ捨てしてあるごみが風に乗って海に落ちる。海を汚すだけでなく、海に住む魚、ウミガメや鯨等にも悪影響を与えているということを知った。

例えばウミガメは、クラゲと間違えて袋を食べてしまうことがあるそうだ。袋は消化管につまったり、胃を傷つけてしまったりすることがある。また、消化されずお腹にたまつたごみで餌を食べることができず栄養失調になり命を落とすウミガメも増えているそうだ。別の事例では、浜辺に打ち上げられていた鯨のお腹の中からも大量のプラごみが出てきたそうだ。

僕は海の生き物が好きだ。大きな海の中を優雅に泳ぐウミガメや、鯨の姿を見てみたい。しかし、人間の心ない行いが多くの海の生物を絶滅の危機にさらしているということを知った。

この事実を危機ととらえ環境と生命を守る取組が行われている。海のプラスチックごみからできた海洋プラスチック百パーセントの腕時計といった物作りだ。こういう活動も、環境問題を改善するためには大切だと思う。しかし、もっと大切な事は、一人一人がごみを分別し、ごみ箱へ捨てるということではないだろうか。物を大切にし、長持ちさせる。自分が出したごみは、責任を持って捨てる。3R を心がけ、ごみに対する意識を高める。そういった、僕たち小学生でもできることを、大人も同じように心がけることが大切だと思う。



特賞

## 「新しい社会を生きる」

富士宮市立柚野中学校 二年 津田 佳月

私の卒業した小学校では、今年の新入生が十九人だったそうだ。私の入学した八年前は、三十人の同級生がいた。世間で言われている、「少子化」を身近に感じた瞬間だった。

日本では今、少子化・高齢化・人口減少が同時進行している。十五歳から六十五歳未満の「生産人口」、十五歳未満の「年少人口」は一九九五年頃をピークに、減少を続けている。総人口は、ピークの二〇〇八年の約一・三億人から、現在は沖縄県の人口に相当する約一四七万人が減っている。しかも、二〇一〇年からの十年間に比べ、二〇二〇年からの十年間は、人口減少数がおよそ二倍に跳ね上がると予測されている。

このことについて、専門家は警鐘を鳴らしている。それらを調べている際、私は驚いた。そういった研究・分析をしている人に、いわゆる「若者世代」が少ないのだ。これからの未来はこれからの人達がつくるのに、と思った。

若者が政治に参加するといえば、選挙の場面でもそうだ。総務省ホームページ、「衆議院 総選挙における年代別投票率」(平成二十九年度)では、なんと二十代の投票率は三十三% だった。一方、一番投票率が高かったのは六十代で、七十二%。二十代の二倍以上である。これからの担う若者は、なぜ投票しないのだろうか。

投票をしない人の意見も分かる。仕事が忙しい、そもそも政治に興味もてない。しかし、私の母は言う。「確かに自分の一票が、直接的に政治には関わらないかもしれない。だけど、みんなの一票が集まってできる結果だから、侮れないよね。今の日本も、先人の投票が反映された結果の社会だし。」

確かにそうだと思う。少子化が進んでいるということは、私達一人一人の意見も通りやすくなるはずだ。私が選挙権をもったら、その貴重な機会を逃さず、積極的に投票したい。

ところで、人口減少というのは悪いことばかりなのだろうか。私個人としては、良いこともあると思う。

まず、選挙の話で言ったように、一人一人の意見が大切にされると思う。有権者の意見が 通るようになると、政治への信頼感が高まり、日本も良い方向へ向かうはずだ。

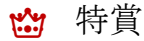
また、人口減少は自然環境の悪化にブレーキをかけるのではないだろうか。例えば二酸化炭素の排出について考えた時。人が減ると、まず自動車の使用者が少なくなる。エネルギーの供給も少なくて済むと予想できる。もちろん空き家も増えるため、さまざまな改革は必要だが、「環境」という視点から見ると、人口減少にメリットが見えてくる。

一方、「経済」の面ではデメリットが生じる。人口減少で消費者が減ると、企業が国に納める税金が減る。すると、障がいを持つ人や社会的弱者を支援する制度や資金が減ってしまうかもしれないのだ。

しかし、企業もただ待ってはいない。人口減少を見こして、早々に海外に拠点を移す企業も珍しくない。また、一昨年施行された「働き方改革」は、正しく行えば人口減少社会でも十分機能する企業を増やす、正に改革だ。人口減少を前提として物事を進めることにより、今までよりさらに効率的に生産性を上げることができるのである。

私は今十三歳だが、十年後、二十年後には、生産人口真ただ中、社会の一員として働いているだろう。その時は、外国から大勢の人が働きに来ているだろうし、今とは違う、より効率化された働き方があたりまえのようにあるかもしれない。今から政治や環境問題に関心を持ち、学ぶことは、十年後きっと役に立つだろう。

歴史に学び、同じ失敗をくり返さないこと。それでも、新しい課題は立ちふさがらるだろう。それらに、一生懸命取り組んでいきたい。



## 「星と仲良く暮らせる社会へ」

武蔵野市立第五小学校 六年 <sup>かねこ</sup>金子 ひなか

今、世界中で最も深刻な環境問題は、『地球温暖化』である。主な原因は、十八世紀ごろ、二酸化炭素の排出が急激に増えた事だ。それにより、地球の平均気温が急激に上がってしまったのだ。

ニュースでは、『二千七十年には、暑すぎて、世界人口の約半分が地球に住めなくなる。』と書いてあった。だから、人間が火星に住むようになる可能性があると聞いた。

この問題に対して、私はよく考えてみた。

地球に人間が生まれたのは約六百万年前。もし本当に、二千七十年に人が地球に住めなくなるとしたら、人間は、たったの六百万七十年で地球をこわしてしまう事になる。

人間より長く生きてきた動物たちは、ちっとも地球を傷つけなかったのに。

そして、もし本当に火星に行くなら、人間は、地球を捨ててしまう事になる。地球は、まるで使い捨て用品のようになってしまう。

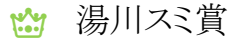
さらに、はじめは純すいで、キレイだった地球を汚してしまったように、火星に行ったら、火星も汚してしまうのではないだろうか。

人間は、頭がよくて、暮らしやすい未来を考えていた。しかし結果的に、地球をこんなにも傷つけてしまったのだ。

もしかしたら、地球温暖化は、人間の手によって止められるかもしれないが、地球を傷つけ、汚してしまったのに変わりはない。

私が大人になったら、この問題は、さらに深刻な問題になると思う。しっかりと、考えて、私たち人間は反省するべきだと思う。そして、もし火星に行くなら、二度と同じ事をくり返さないように、一人一人がこの問題について、考えるべきだと思う。

私は、まだ小六だけど、『地球温暖化』についてよく考え、人間と星が仲良く暮らせる社会を、作って行きたいと思っている。



## 「プラスチックごみと動物たちの被害」

綾部市立西八田小学校 六年 <sup>あわの</sup>栗野 <sup>みさき</sup>実咲

今、世界では様々な環境問題が起こっています。たとえば、地球温暖化現象やプラスチックごみ問題、森林ばっさいなどの問題があります。その中で私は、プラスチックごみ問題について考えてみました。

プラスチックごみは年間で約八百万トンもの量が海に捨てられているそうです。その八百万トンのプラスチックごみをエサだと思って食べてしまったり、からまって動けなくなったり、ストローなどを鼻につまらせたりして、死んでしまう動物がいます。

プラスチックごみが原因で死んでしまう動物の中には、海の中にいる動物だけでなく、海鳥などもあります。陸に打ち上げられたライターやストロー、ナイロンぶくろなどをえさだと思いこんで食べてしまい、多くの海鳥が被害にあっています。そして、年間に死んでしまう海鳥の数は、百万羽にのぼるとの計算もあるみたいです。

このような問題に対して少しでも力になれるよう、私の家では買い物に行った時、ペットボトルなどのプラスチック容器もいっしょに持っていき、お店のリサイクルにまわしたり、資源ゴミの日を持って行ったりしています。また、私の地域では、道路のごみ拾いをみんなで行うなど、町の中をきれいにする取り組みもしています。

最近では、多くの方がエコバッグを使って環境のことを考えている人が増えてきました。他にもプラスチックのストローやスプーン、フォークなどを、もらわないようにする人や、シャンプーリンスなどプラスチック容器の物はつめかえ用を買う人が多いと思います。

私は、将来海がごみだらけにならないように、一人でも環境改善に参加する人が増えてほしいと思っています。

👑 第50回記念特別賞  
「「知る」ことが未来をつくる」

大館市立有浦小学校 六年 <sup>はんだ</sup>半田 <sup>ひさき</sup>悠貴

毎年、8月になるとテレビや新聞で被爆体験者の話をよく見聞きする。小さい頃はテレビの画面に映る映像がとても恐ろしく、きちんと見る事が出来なかった。しかし、学校で戦争について学んだり、話を聞くようになってから、自分の住む国で起こった出来事を知らなくてはならないと思う様になってきた。

「二度と戦争を繰り返してはいけない」当たり前と思いついて聞いていた言葉だが、ぼくはその意味をしっかりと理解していただろうか。平和祈念式典ではぼくと同じ6年生がこども代表で思いを読み上げた。「自分たちが被爆体験者の人たちの声を語り継いでいなくてはならない。それがぼくらの使命なのだ」と言っていた。東北に住むぼくと、苦しみを知る広島や長崎の人たちと同じように平和を語れるのか。

そんな時一緒に式典を見ていた祖母が「昔、大館にも外国人の強制労働者が大勢いたのよ」と教えてくれた。戦争は離れたところでの悲劇と思っていたが、こんな近くでそんな話があったことに驚いた。過酷な労働や虐待で多くの外国人が亡くなったこと、逃げ出した外国人を探しだすため警察が土足で上がり込んで来た時の恐怖。その時は家族を守ることに必死で畑に隠れていると知っていても水をあげることも出来なかったことを後悔しているとも話してくれた。

戦争は日本人だけでなく外国人も犠牲になった。片方では加害者に、もう一方では被害者にもなる。どちらにも家族がいて悲しむ人がいるという事実。

これからの僕たちに出来ることは「知る」ことだと思う。知ることで、深く考え、行動ができる。核の抑止力でつなぎとめる平和ではなく、対話と理解でこれからの平和を作っていきたいと強く思う。過去を知ること、相手を知ること、本当に大切なものが分かるはずだから。僕らの未来は僕らが守っていくのだ。